

情報組織化研究グループ月例研究会・情報知識学会関西西部会研究会発表

MLA 連携について: 情報組織化をも意識して¹

田窪 直規

(近畿大学 司書課程・学芸員課程担当)

目次

0. はじめに	p.1.
1. MLA 連携の動向	p.1-3.
2. MLA 連携の理由・特徴	p.3-4.
3. 連携基盤	p.4.
4. 連携連続体と連携の触媒	p.5.
5. MLA の差異と位置関係	p.5-6.
6. 日本の問題点	p.6.
7. おわりに	p.6.
注記	p.7-8.

0. はじめに

- ・ 元ネタ：図書館情報学会の論集(2010)¹⁾

元々ネタ：私立大学図書館協会発表(2008)²⁾

その他のネタ：JADS20 周年記念行事発表(2009)³⁾

- ・ 「MLA 連携」という用語←日本で定着

英国の“The Museums, Libraries and Archives Council”（略称 MLA）に

ちなむ←順番で問題が起こらないよう（JADS の影響）

- ・ 外国ではいろいろ：LAM、ALM など

1. MLA 連携の動向

1.1. 世界レベルで注目

- ・ さまざまな MLA 連携事例（後で例示）←インターネット利用

¹ 本研究（の一部）は以下の科研費によっている。

情報環境の変化に適切に対応する目録規則の在り方に関する研究.(科学研究費基盤研究(C) 課題番号 22500223) . 研究代表者: 渡邊隆弘.

- ・ 2005 : 「図書館情報教育と研究のための欧州協会(EUCLID: European Association for Library & Information Education and Research)」による MLA 連携を視野に入れた教育プログラム⁴⁾
 - ←情報専門職 (情報メディエーター) ととらえ、一般化・抽象化
- ・ 2008: IFLA と OCLC から相次いで MLA 連携の報告書が出る⁵⁾
- ・ 2008-2010 : M と L と A の専門誌が連携して MLA 連携の特集号を出す⁶⁾
- ・ 2010 : Encyclopedia of Library and Information Sciences 第3版⁷⁾
 - ←図書館情報学の周辺領域を扱う
 - 図書館情報学、博物館学、アーカイブ学が収斂方向にある現状を反映

1.2. 日本の動き

- ・ 日本でも注目
 - 2007 : 東京大学のグループによるシンポジウムで取り上げられる⁸⁾
 - 2008 : 私立大学図書館協会総会・研究大会で取り上げられる⁹⁾
 - 2009 : JADS 20周年記念行事で取り上げられる¹⁰⁾
 - 2010 : 図書館情報学会の研究大会で取り上げられる¹¹⁾
 - 明治大学図書館情報学シンポジウムで取り上げられる¹²⁾
 - 2011 : 人文科学とコンピュータ研究会の小特集で取り上げられる¹³⁾
 - 2009-2011 :
 - 知的資源イニシアティブ. 日本の MLA 連携の方向性を探るラウドテーブル. I ~ III.
- ・ 日本における最近の連携的事例
 - 2007 : 国立国会図書館「PORTA」の公開¹⁴⁾
 - 2008 : 「知恵の環館: 芳賀町総合資料館」のオープン¹⁵⁾
 - 人間文化研究機構「統合検索システム」¹⁶⁾
 - 2009 : 「福井県地域共同リポジトリ」¹⁷⁾
- ・ 因みに: 実は日本は早かった
 - 1963 : 京都府立総合資料館

1994：駿河台大学文化情報学部（現、メディア情報学部）

←MLA を統一的に扱い、メディエーターを育成¹⁸⁾

1995？：COMET(Computer-Operated Multi-Exchange of Tokushima)¹⁹⁾

1990年代前半から：JADS の取り組み



2. MLA 連携の理由・特徴

2.1. 連携の理由：ウェブ（の検索エンジン）への対抗戦略

情報資源としてのウェブの出現→MLA の地盤沈下

←ウェブを逆手にとってこれを利用した逆襲

ネット上の MLA 連携によるポータルサイトの構築

検索エンジンによる情報収集に勝てる可能性

∴検索エンジンによる検索：

ノイズの山、玉石混淆、表層ウェブのみ

連携サイトによる検索

ノイズ少ない、玉のみ、深層ウェブも

←別の視点

非情報組織化的検索手法 VS 情報組織化に基づく検索手法

←情報組織化の逆襲

2.2. 連携の特徴

- ・ 実体としての連携や内部連携²⁰⁾より、デジタル技術によるネット上の連携が中心（もしくは注目）

ネット上では、実世界で立ちはだかる MLA 間の障壁が低くなる

MLA の資料をデジタル化してしまえば、資料を統合的に扱え、ネットを利用して容易に提供できる

ワン・ストップ情報チャネルの実現

- ・ 大規模連携と小規模連携

大規模連携：間接連携型（アグリゲーター型）、一般指向

例：ヨーロッパーナ²¹⁾

小規模連携：直接連携型、目的志向

例：ウスター美術館とホリー・クロス大学図書館²²⁾

3. 連携基盤

←マイケル・ゴーマンの指摘²³⁾

技術ベースで進むが、本当は政策や標準などの連携基盤が大事

3.1. 制度的・組織的基盤（英米の）

- ・ 英国：MLA

JISC(Joint Information System Committee)の

Strategic Content Alliance、Resource Discovery Taskforce

- ・ 米国：IMLS(Institute of Museum and Library Services)

OCLC の RLG Partnership

3.2. 情報組織化面

- ・ 図書館の FRBR と博物館の CRM(Conceptual Reference Model)の調和プロジェクト²⁴⁾ ²

←FRBR の OO 化と CRM との調整

- ・ 図書館界：著者（責任者）としての「家(family)」の取り込み²⁵⁾

←文書館界はもともと「家」を重視

- ・ 典拠ファイル

フランス：三館別標準から相互運用性を重視したマルチセクター標準へ²⁶⁾

ノルウェー：博物館と図書館の典拠の合体²⁷⁾

- ・ メタデータの共有化と探索インフラの提供←JISC 等の RDT²⁸⁾

² 博物館世界の情報組織化: MICMO（博物館世界の DC（コア・メタデータ））→IGMOI（標準ではなく指針）→CRM（博物館によるデータパターンの差異を吸収するためのオントロジ）

4. 連携連続体 (Collaboration Continuum) と連携の触媒(catalyst)

←ギュンター・ワイベル(Günter Waibel)ら²⁹⁾

連携模索の時の参考³⁰⁾

4.1. 連携連続体

1. 接触(contact) : たがいに会って会話を開始するレベル
2. 協力(cooperation) : インフォーマルな連携のレベル (情報共有程度)
3. 協調(coordination) : 必要に応じてのアドホクな連携のレベル
4. 共同(collaboration) : 長期の深い依存関係と経済的報酬のレベル
5. 収斂(convergence) : 連携がインフラストラクチャーとなるレベル

←融合には触れず

4.2. 連携の触媒

- 1)連携のための「ビジョン」、2)連携へのスタッフの熱意を高める「委任」、3)スタッフ評価に連携活動を加える「インセンティブ」、4)連携の段階による「エージェント[担当]の変更(change agents)」、5)連携作業を行うための「停泊所(mooring)」もしくはホーム・ベース (組織内で位置づけられた仕事場)、6)技術、資金、スタッフといった「資源」、7)MLAの違いに対応できる「柔軟性」、8)聴衆[利用者]、同様な機関(peer institution)[の様子]、資金提供組織(funding organization)・専門職組織など、「外部の触媒(external catalysts)」、9)連携関係の基礎となる「信頼」

5. MLA の差異と位置関係

←実体をも見据えて連携するときに特に重要

5.1. MLA の差異

- ・ 目的 : 図書館→利用、博物館→保存、文書館→保存・利用
- ・ 専門職 : 司書→サービス職性、学芸員→研究職性、
アーキビスト→研究職性・サービス職性

- ・ メディア：図書館→メッセージ、博物館→キャリアー
文書館→メッセージとキャリアー

5.2. MLA の位置関係

- ・ 目的、専門職、メディアのいずれの観点からも：L・A・M（もしくはM・A・L）
- ・ LA と MA の親和性

例：LAC(Library and Archives of Canada)、奈良県立図書情報館

NVMA(North Vancouver Museum & Archives)、茨木県立歴史館

←L と M の距離

大谷大学真宗総合学術センター内の図書館と博物館³¹⁾

←2002.6：図書館課から図書・博物館課

- ・ M の否定的見解：英国博物館協会会長³²⁾

6. 日本の問題点

←先進する一面はあったし、注目されているのに連携事例が少ない

←ネットレベルでも実体レベルでも

- ・ 日本の A の弱さ:連携相手にならぬ、吸収
- ・ 日本では MLA ではなく MLK の枠組み
- ∴日本でも MLA の枠組みか MLAK の枠組みが必要
- ・ 日本のコンテンツ・デジタル化政策の弱さ

←特にネットで連携する場合

7. おわりに

- ・ 本当は MLA 連携より、デジタル・メディア空間のデザインが本質³³⁾

MLA にとどまらず、すべての情報資源を統合的に扱う枠組みの必要性

情報の流通・消費・生産が一体化することを意識した枠組みの必要性

線形メディアから非線形メディアへの移行による認識系の変容を意識した

枠組みの必要性

注記

- 1) 田窪直規. 博物館・図書館・文書館の連携: いわゆる MLA 連携について. 図書館情報学のフロンティア. 2010, No.10, p.1-22.
- 2) 田窪直規. 大学図書館と文書館・博物館の連携: 主に博物館に注目して. 私立大学図書館協会会報. 2009, No.132, p.155-178.
- 3) 田窪直規. “MLA 連携の動向とこの連携を捉える 3 つの視点”. MLA 連携の現状・課題・将来. 水谷長志編. 勉誠出版, 2010, p.87-91.
- 4) Kajberg, Leif; Lørring, Leif ed. European Curriculum Reflections on Library and Information Science Education. The Royal School of Library and Information Science, Denmark, 2005, 241p. http://www.library.utt.ro/LIS_Bologna.pdf, (accessed 2010-03-15).
- 5) 以下、IFLA、OCLC の順で記す。
Yarrow, Alexandra; Clubb, Barbara; Draper, Jennifer-Lynn. Public Libraries, Archives and Museums: Trends in Collaboration and Cooperation. IFLA, 2008, 51p. <http://archive.ifla.org/VII/s8/pub/Profrep108.pdf>, (accessed 2010-02-24).
なお、以下の文献はこれの日本語訳である。
ヤロウ, アレクサンドラ; クラブ, バーバラ; ドレイパー, ジェニファー リン著; 垣口弥生子, 川崎良孝訳. 公立図書館・文書館・博物館: 協同と協力の動向. 京都大学図書館情報学研究会, 2008, 68p.
Zorich, Diane M.; Waibel, Günter; Erway, Ricky. Beyond the Silos of the LAMs: Collaboration among Libraries, Archives and Museums. OCLC, 2008, 59p. <http://www.oclc.org/research/publications/library/2008/2008-05.pdf>, (accessed 2010-02-24).
- 6) 以下、特集号の書誌事項を刊行年月の昇順で記す。
Archival Science. 2008, Vol.8, No.4.
Museum Management and Curatorship. 2009, Vol.24, No.4.
Library Quarterly. 2010, Vol.80, No.1.
- 7) 古賀崇. 「MLA 連携」の枠組みを探る: 海外の文献を手掛かりとして. 明治大学図書館情報学研究会. 2011, No.2, p.2-9. この点への言及箇所は p.5.
- 8) 東京大学大学院教育学研究科生涯学習基盤経営コース, 同人文社会系研究科文化資源学専攻, 同情報学環・学際情報学府共催. 知の構造化と図書館・博物館・美術館・文書館: 連携に果たす大学の役割: 公開シンポジウム. 於: 東京大学弥生講堂, 2007.2.17.
- 9) これの記録が次に掲載されている。私立大学図書館協会会報. 2009, No.132.
- 10) 水谷長志編. MLA 連携の現状・課題・将来. 勉誠出版, 2010, 296p.
- 11) 図書館情報学会研究委員会編. 図書館・博物館・文書館の連携. 勉誠出版, 2010, 186p, (図書館情報学のフロンティア, 10).
- 12) このシンポジウムでの発表者である古賀氏が、発表におよそ基づき文章化したものが注 7) 文献。
- 13) 2011 年 1 月 15 日に開催された情報処理学会人文科学とコンピュータ研究会で MLA 連携に関連する小特集が生まれ、その記事がその研究会の論集 (雑誌) に収録されている。
岡部晋典, 福島幸宏, 村田良二, 後藤真. 人文科学とコンピュータ研究を支える資料を考える: MLA の立場から. 情報処理学会研究報告. 2011, 2011(7), p.1-3.
- 14) Porta: 国立国会図書館デジタルアーカイブポータル. <http://porta.ndl.go.jp/>, (参照 2010-02-25).
- 15) 知恵の環館: 芳賀町総合情報館. <http://www.town.haga.tochigi.jp/johokan/index.html>, (参照 2010-02-25).
- 16) 統合検索システム: 人間文化研究機構. <http://www.nihu.jp/sougou/kyoyuka/tougou/index.html>, (参照 2010-02-25).
- 17) 福井県地域共同リポジトリ. <http://crf.flib.u-fukui.ac.jp/>, (参照 2010-02-25).
[記名なし]. 学術論文をネットで閲覧: 共同リポジトリ: 大学と図書館など連携. 読売新聞: 朝刊. 大阪版, 2009.5.13, p.26.

- 18) 原田三朗. 文化情報学部の創世記. 文化情報学. 2003, Vol.10, No.2, p.75-88. この点に言及箇所は p.80.
- 19) 水谷長志. 美術資料をめぐる〈外なる／内なる〉ネットワークを考える. 現代の図書館. 1996, Vol.34, No.3, p.151-154. これに関する箇所は p.152, 153.
- 20) 水谷は注 19)文献などで、MLA 連携を外なるものと内なるものに分けている。内なる連携とは、M・L・A のそれぞれが、自身の中に他の 2 館的な要素を内包している点に注目するものである。
- 21) Europeana. <http://www.europeana.eu/portal/>, (accessed 2010-02-05).
- 22) Reilly, Karen; De Verges, Jolene. A Dynamic Model of Museum and Academic Library Cooperation: Cataloging Image Collections. *College & Undergraduate Libraries*. 2001, Vol.8, No.1, p. 15-24.
- 23) Gorman, Michael. The Wrong Path and the Right Path: The Role of Libraries in Access to, and Preservation of, Cultural Heritage. *New Library World*. 2007, Vol.108, No.11/12, p. 479-489.
- 24) Bekiari, Chryssoula; Doerr, Martin; Boeuf Patrick Le ed.. FRBR: Object-Oriented Definition and Mapping to FRBRER. Ver.1.0, International Working Group on FRBR and CIDOC CRM Harmonisation, 2009.6, 146p. http://cidoc.ics.forth.gr/docs/frbr_oo/frbr_docs/FRBRoo_V1.0_2009_june_.pdf, (accessed 2010-03-11).
- 25) Patton, Glenn E. From FRBR to FRAD: Extending the Model. World Library and Information Congress: 75th IFLA General Conference and Council, 23-27 August 2009, Milan, Italy. 2009.8, 10p. <http://www.ifla.org/files/hq/papers/ifla75/215-patton-en.pdf>, (accessed 2010-03-15). このことへの言及箇所は p.5.
- 26) Bourdon, Françoise. Modeling Authority Data for Libraries, Archives and Museums: A Project in Progress at AFNOR. *Cataloging & Classification Quarterly*. 2004, Vol.39, No.1/2, p. 505-516.
- 27) Hedegaard, Ruth. The Benefits of Archives, Libraries and Museums Working Together: A Danish Case of Shared Databases. *New Library World*. 2004, Vol.105, No.7/8, p. 290-296. ノルウェーの典拠への言及箇所は p.290
- 28) [不明]. JISC 等による博物館・文書館・図書館のメタデータの共有計画. カレントアウェアネス-E. 2010.07.08, No.174. <http://current.ndl.go.jp/print/book/export/html/16484>, (参照 2011-05-04).
- 29) ワイベルらは OCLC のレポートでもこれらに言及し、そのほかにも発表者の知る限り 2 本の文献でこれらに言及している。そのうち、このトピックに絞った文献をあげる。
Waibel, Günter; Zorich, Diane M; Erway, Ricky. "Libraries, Archives, Museums: Catalysts along the Collaboration Continuum," *Art Libraries Journal*. Vol.34, No.2, 2009.4, p.17-20. 連続体の箇所は p.17-19, 促進するものの箇所は p.19-20.
- 30) なお、注 5)で示した IFLA のレポートでも「連携の手引き」という、連携を行う際に参考になると思われることが記されている（この点に言及箇所は p.31-36（訳の方では p.39-45））。
- 31) 宮崎健司. 大谷大学博物館の設立と図書館. *大学図書館研究*. 2004, No.72, p. 50-57.
なお、日本における大学図書館と博物館の連携については、以下のような文献がある。
安達匠. 人文系資料を対象とした大学図書館・大学博物館連携. *アート・ドキュメンテーション研究*. 2010, No.17, p.3-17.
- 32) Taylor, Mark. For a Good Example of a Menage à Trois, Don't Look at Museums, Libraries and Archives. *Museums Journal*. 2008, Vol.108, No.9, p.17.
- 33) 田窪直規. 電子図書館から電子メディア空間へ、そしてその意味するところ. *人文学と情報処理*. 1995, No.9, p.23-30.